

静物寫生の話〔七〕

大下 藤次郎

△鉛筆寫生については猶いくらも話すことはあるが、あまり長くなるから、是から木炭畫の事を少しく説明しやう。

△まづ材料から言へば、紙と、燒炭と、畫板若くはカルトン、留鋏又は紙挟み、喰パンかさもなくては練ゴムがあればよい。

△紙は木炭用紙といふて特製のものがある、目のサラ／＼した硬い紙で、一尺六寸に二尺位ひの大いさで純白なると稍黄味を帶びたのと各種の色の漉込んだのとある、そして其品質にも、上下があり又厚薄がある、他の紙でも木炭畫の描けぬといふことはないが、價も廉いことゆへ木炭用紙を用ひたらよい。

△木炭は舶來と和製とあり、其質にも硬いのと軟かいのとある、又太いのと細いのと割つたのと圓いのと種々に區別されてゐる、其畫くべきものにより相違もあり、又人々の好みもあるが、初學の人の用ゐるのは、あまり硬いのよりはいくらか軟か目の方がよいであらう。

△畫板は紙より幾分か大きければ何でもよい、畫學生は通常カルトンを用ひる、それは木炭用紙よりは稍々大きな厚いボール紙にクロス若くは紙を貼つたもので、書物の表紙のやうに、二枚合せて繪を挟むやうになつてゐる、繪をかゝぬ時折返して疊んで置けば畫面を汚すことがないから便利である、大きなもの故彩料店から送らせることが出來ぬから、ボール紙のある地方の人は自分で製造したらよい。

△留鋏は普通のでよい、カルトンを用ひる時は紙挟みの方がよい、カルトンの上部に紙を挟んで下けて置けばよい、下の方は留めなくともよい、尤も長い時日を費して大きな繪でも描く時は枠に水貼することもある。

△輪廓を消したり、濃い處を淡くしたり、暗い處から白く抜いたりする爲めに喰パンが必要である、これが

なくては木炭畫の稽古は出来ぬ、喰パンは粘々するやうに軟かてもいけぬ、ポロ／＼するやうに硬くてもいけぬ、製造されてから一日位たったのがよい。

△喰パンの代用として練ゴムを用ひられるが、これでも間に合はぬこともない、佛蘭西あたりには喰パンの代用品があつて、竹見屋へ来たこともあつたそうだが今は品切とのことである、尤も田舎などで喰パンを得られぬ土地では、蒸饅頭の皮でも役に立つ、餛飩粉を練つてやゝ硬くしたのも用ひられる。

△其他に木炭を拂ふ鳥の羽根、穂の硬い油繪筆、木炭の尖を細くするためのヤスリ紙、並びに畫架があればこれで萬端用意が出来たので、描て仕舞つからの跡始末即ち木炭を紙に定着させるため、フイキサチフと霧吹とは缺くべからざるものである。

△次回には木炭で靜物寫生をする順序と方法とをお話しやう。(つゞく)

水彩畫の繪具(その五)

學生用繪具でも差支なく使用されるものもあるが、中にはまるで色の異つてゐるのがある、エルローオークル、ヴァイミリオン、ニユートラルチント、エマラルドグリーン、ガンボーヂ、オレンヂ、ローズマダー、ピンクマダーの類は殆ど用ひられぬ、コバルトも不透明で白が入つてゐるやうでよい色は出ぬ、ローズマダーの如きは普通壹圓もするのをタツタ五錢で賣るのであるから、テンデ其色が雲泥の相違を呈してゐる。

ラファエル會社の分は、ニユートン製の美術家用と殆ど同一のやうに思はれる、或は品質が勝つてゐるかも知れぬがまだ深く使用して見ぬ。村田や、花廬屋製の分は全く使用せぬから其良否を明言しがたいが、如何に愛國心がないと曰はれても、大切な製作をこれ等の繪具で描く氣になれない、無論中には充分使用に耐へる繪具があるには相違ないが、製法も不完全のやうに思はれるし、其價も比較的安くはないやうである。